

『孽海花』における『三十三年の夢』の受容

寇 振 鋒

1 はじめに

『孽海花』は魯迅（1881～1936）によって「四大譴責小説」と命名された清末の著名な小説の一つである。小説は金雯青、傅彩雲を主人公として、清末三十年の歴史を描こうとした雄大な長編小説である。

『孽海花』第1～6回の作者は、宮崎滔天の『三十三年の夢』を『三十三年落花夢』に漢訳した訳者金松岑である。第1、2回は麒麟というペンネームで、江蘇省出身の留学生によって1903年4月に東京で発刊された雑誌『江蘇』第8期に掲載された。1904年1月発行の『三十三年落花夢』と同年4月発行の『自由血』巻末に掲載された「愛自由者撰訳書」広告によると、金松岑自らは『孽海花』を単行本として出版する意志があった。しかし、結局、実現に至らず、1904年夏秋の頃¹、『孽海花』の創作を曾樸に依頼した。

当時、金松岑は書き終えた第1～6回の分の原稿を、翻訳や小説を推奨していた曾樸に見てもらった。江蘇省常熟県で生まれた曾樸は、字を孟樸、ペンネームを東亜病夫と言い、翻訳家、作家であり、政治家でもあった。1903年に徐念慈らと「小説林社」を起こし、1907年に雑誌『小説林』を創刊した。1927年に真善美書店を設立し、雑誌『真善美』を発行した。小説として『孽海花』のほかに、自伝的小説『魯男子』などが挙げられる。ユーゴーの『九十三年』などのフランス作品の翻訳出版にも尽力した。

その当時、金松岑の原稿を見た曾樸は、幾つかの提案を示した後、金松岑は続作の責任を曾樸にすべて一任した²。ただし、続作は二人で構想を練ったのである。「其の予定の60回は、すなわち私と孟樸（曾樸の字——引用者注）と共同で斟酌して定めたのである。」³とあるように、予定していた全書の60回分の題目は二人によって決められた。そして、曾樸は金松岑を引き継いだ後、第1～6回の原作を改め、三ヶ月で20回を書き上げ、第1、2集に分けてそれぞれ1905年、1906年に小説林社より『孽海花』歴史小説として発行した。印刷はともに、中国書の印刷を主とした東京の翔鸞社が行った⁴。

意外にも、この本は非常によく売れ、1、2年の間に版を15回重ね、50000部以上売り尽くした⁵。曾樸はその後1907年までに25回分を発表した。1907年から1927年までの20年間の中断を挟んで、1927年から1930年4月にかけて『孽海花』は35回まで書き続けられた。そして、1930年4月まで雑誌『真善美』第21～35回に連載された。結

局、二人で予定した60回の計画は35回までとなり、中途半端に終わった。

周知のように、『孽海花』に関する研究成果は数多く存在する。そして、中国における『三十三年の夢』の漢訳本は、1930年代までに少なくとも19版まで刊行された⁶。しかし、『孽海花』と滔天の『三十三年の夢』との関わりについての論考は管見の限り皆無に等しい⁷。本稿では、『三十三年の夢』が『孽海花』に及ぼした影響について検討することを主目的とする。

2 影響関係が成り立つ前提条件

本論に入る前に、まず、『孽海花』と『三十三年の夢』の両作品の関わりおよびその時代背景を明らかにしておく。以下、二つの前提条件について論じる。

(1) 金松岑という人物の役割

金松岑は『三十三年の夢』の漢訳者であるばかりでなく、『孽海花』を曾樸に先立って執筆した作者でもある。ここでは、『孽海花』の創作における金松岑の役割を探ってみる。

1904年に金松岑が自ら記した第1～6回（『江蘇』第8期に掲載された第1、2回を含む）をそのまま曾樸に譲渡したため、その部分には曾樸によって改められた箇所が相当生じた。しかし曾樸によれば、金松岑の文章と曾樸自らが直した文章が入り混じって、自分でも彼我の区別がつきにくくなってしまったとはいうものの⁸、金松岑の役割の大きさは痛感していた。さらに、『孽海花』全60回分の題目は二人が共同で決定している。曾樸に直された小説の第1回（発端）によれば、各回の題目は、金松岑の口述に基づいて、曾樸が書いたものである。これにより、『孽海花』の全体の構想は本来、金松岑の腹中にあったことは明らかである。

小説の六つの時代、および110人の登場人物のリストは曾樸によって作られたものである。金と曾の二人で各回の題目を決めた1904年から23年も経た1927年の五回目の修訂以降、曾樸が二人で決めた60回分の題目に完全に従うことはなかった。しかしながら、「すべての清末譴責小説を凌駕するこの歴史的長編の構想には、金松岑の胆力と見識、心血、そして知恵と創造が含まれている。」⁹と金松岑の役割は研究者に高く評価されている。

しかも、1917年にまでに、単行本および『小説林』誌における連載本には、「愛自由者発起、東亜病夫編述」と金曾二人のペンネームが並べて記されている¹⁰。11年後の1928年1月に20回本を修訂し、真善美書店より出版した際、序に代わる文章である「修改後要説的幾句話」の冒頭において、曾樸は「この書を生み出したのは私でなく、愛自由者である。」と改めて金松岑の役割を強調し、また「愛自由者」の実名が金松岑であることを世間に公開した。なお、『江蘇』第8期に掲載された『孽海花』を「章回体小説」

と設定し、曾樸は章回体の形式を受け継いで書き続けた。

以上の考察により、『孽海花』の構想から創作までの過程において、金松岑の存在が曾樸に非常に重要視されていたことが分かる。さらに言えば、『孽海花』の創作において、金松岑ないし『三十三年落花夢』が、曾樸とその『孽海花』に及ぼした影響を想像することが可能となる。つまり、金松岑は『孽海花』と『三十三年の夢』の間における架け橋的な役割を果たすのに不可欠な人物である。

(2) 発行時期から見た両作品の関わり

以下、『三十三年落花夢』と『孽海花』のそれぞれが発行された時期に着目して前者が後者に及ぼした影響について考えてみる。

『三十三年落花夢』は1903年9月19日から訳し始めたと思われ、同年11月19日に完成した。そして金松岑は『江蘇』第5期(1903年8月23日)に「壮遊」という号で「国民新靈魂」を掲載し、滔天の俠気を絶賛したことから、この文章の執筆前に『三十三年の夢』をすでに目にしていたと思われる¹¹。

金松岑は『孽海花』の第1、2回を『江蘇』第8期に初公開した。『江蘇』第8期の発行されたのは黄帝紀元四千三百九十四年十月初一日、すなわち西暦1904年1月17日である。つまり、『孽海花』の連載開始時期は『三十三年落花夢』の公刊時間1904年1月12日より5日遅れている。しかし、先行研究によると、金松岑の『孽海花』の執筆時期は1904年2月8日日露戦争勃発の後であり、しかも『江蘇』第8期の発刊されたのは1904年1月17日ではなく、同年5~6月の間であると指摘されている¹²。以上の説に従えば、金松岑の『孽海花』の執筆は『三十三年落花夢』の漢訳、公刊の後に始まったことが分かる。

さらに、『孽海花』の広告からも当該の影響を察知することができる。1904年1月に発行された『三十三年落花夢』の巻末に掲載された「発行所 上海国学社」と記した「愛自由者撰訳書」の広告には、「孽海花」が入っている。広告の最後には「現已付印、即日出書」と記されている。しかし、三ヶ月後の同年4月の鏡今書局より発行された『自由血』の巻末にも同じく「愛自由者撰訳書」の広告が付け加えられている。そして、「孽海花」項の最後には依然として「現已付印、即日出書 上海鏡今書局発行」とある。ただし、この時には発行所が変更された。前述のように、1904年2月8日日露戦争勃発以降の執筆だと仮定したら、一回目の広告の際は執筆を予定していた時期であり、むしろ『三十三年落花夢』漢訳の完了後に、執筆計画が念頭におかれていたと思われる。二回目の広告の際は、おそらくすでに執筆を始めていたであろう¹³。

以上より、『孽海花』が『三十三年落花夢』『自由血』の翻訳の後に執筆されたことが分かる。つまり、その刊行の時期から考察すると、『三十三年の夢』が『孽海花』に影響

を及ぼした可能性が十分あると考えられる。

3 小説の構成から見た影響の可能性

この節では、『孽海花』が『三十三年の夢』の構成から影響を受けた可能性のある点について、取り上げることにする。

(1) 両作品の骨組み、真実性について

『孽海花』は当時の政治外交の様子を反映させるべく、清末三十年間の歴史事件を描写するつもりであった。最初、金松岑は「パミール境界事件、ロシア虚無党事件、東北三省事件、最近の上海革命事件、東京の義勇隊事件、広西事件、日露交渉事件」という七つの歴史事件によって構想していた。これを引き継いだ曾樸は、金松岑と二人で60回の題目を決めたうえで、「旧学時代」「甲午時代」「政変時代」「庚子時代」「革新時代」「海外運動」という六つの時代を『孽海花』において設定した。つまり、『孽海花』は六つの時代、60回の題目から構成されている。そして、『三十三年の夢』は「修養時代」「暹羅活動時代」「南支南洋活動時代」「惠州事件活躍時代」という四つの時代、28章からなっている¹⁴。この点にも両者の類似性がうかがわれる。

まず、『孽海花』の男性主人公金雯青のモデルとされる洪鈞は、金松岑と同じく江蘇省呉県の人である。女性主人公傅彩雲のモデルは清末名妓賽金花である。金松岑自らも、「無方針にでっちあげたものではない」¹⁵と証言している。そして、「使節として露、独、蘭、奥へ行く洪鈞（文卿）を主役（書中の仮名は金雯青）とし、洪の妾賽金花（書中の仮名は傅彩雲）の物語を背景とする。したがって、すべてノンフィクションである。」¹⁶という同様の指摘も見られる。なお、同時代の大翻訳家林紓も、「『孽海花』は小説でなく、三十年の歴史である」¹⁷と指摘し、蔡元培は『孽海花』の真実性について以下のように述べている。

『孽海花』の出版の後、〔この小説は（引用者注）〕私の好みに最も合っていると思った。人物や逸事を当てこしたものが多く、それは以前の小説には見られないもので、さらに疑わしい故事、可笑しな迷信でも、当時の言い伝えに基づき、作者が捏造したものではない。加えて書中の人物の大半は私は見たことがある。書中の事実の大半はよく耳にしたのであるから、読んでみると更に面白い。¹⁸

蔡元培の証言から、『孽海花』の独特の風格は、その真実性にあり、しかも、身近な事件や人物が描写されていたからこそ、面白く読まれていたことが分かる。

つまり、『孽海花』が真実性を有することはすでに広く認められている。そして、曾樸によって、金松岑が書いた孫文などの革命党を述べている第4、5回を28回以降に移

動したのも、時間上の史実性を尊重するためである¹⁹。もちろん、小説としては、すべてが史実によっているわけではないが²⁰、『孽海花』は金雯青、傅彩雲を全書の中心として、そこに織り込まれている30年間の歴史事件の真実性はかなり強い。さらに、『孽海花』は「一部本場のニュース小説」²¹であったとの指摘もある。これは小説の真実性に注目したものである。

一方、『三十三年の夢』は自叙伝なので、滔天自身がすなわち全書の主人公であり、真実の歴史事件が終始貫かれている。

以上から分かるように、『孽海花』と『三十三年の夢』との類似性は相当高いと言わざるを得ない。

そして、両作品の真実性は、登場人物の名前にも反映されている。『三十三年の夢』は、実名をそのまま使用している。もちろん、その中には実名に伏せ字を使い、○（漢訳本では□にされている）で示された部分もあり、そのことがかえって、真実性を高めるように思われる。『孽海花』は○や□を使わず、同音字か音の近い字によって、実名中の1文字を変えている。その実名と仮名とがほとんど相半ばしている。1文字を変えたくらいでは、当時の人物を推測することは容易であり、実質的に実名と変わりはない。つまり、両作品はともに実名或いは実名に近い名を用いて真実の社会舞台を構築したと言える。

要するに、『孽海花』における時代の分け方、歴史事件、および登場人物の実名使用などは、『孽海花』以前のその他の清末小説中には見られないものである。そのため、両作品には影響関係の可能性があるかと推測する。

(2) 政治を主旨とする視野

『三十三年落花夢』は政治宣伝のために訳されたものである。原作『三十三年の夢』が政治小説として認められているのと同様に、この『三十三年落花夢』も政治宣伝を主とする小説として認められているものである²²。

金松岑は『三十三年落花夢』中の「説略」において、「其の思想變動、進化は吾が国民の参考に資するに足るものとなりうる。」²³と賞賛する。また、「三十三年落花夢」広告において、「頑固貪欲な者も清廉とし、意気地なしの者も発奮させる。」²⁴と評価しつつ、『三十三年落花夢』を国民の革命の指針とすることができると読者に訴えている。

つまり、『三十三年の夢』の政治宣伝品としての役割については、金松岑は翻訳時において、すでに十分認識しており、革命思想も翻訳と同時にさらに強まったと思われる。なお、金松岑は『自由血』の広告における「『刺客党綱伝』を読むが如く、『水滸伝』『七侠五義伝』を読むが如く、歴史小説の美しさをともに有する。」²⁵との文言に基づき、ロシア虚無党の歴史を描く『自由血』を、『三十三年落花夢』と同じように魅力のある政

治宣伝品として訳そうとしたのであろう。

『孽海花』の創作の契機は、江蘇省出身の留学生が編集する『江蘇』の要請による。編集人であり、かつ同郷人である陳去病が金松岑に文章の執筆を求めたので、金松岑はその要求に応じて『孽海花』を書いた。

しかし、創作の根本的な動機は、「金氏は露帝国の侵略野心を暴き出す小説を書くつもりである。」²⁶と指摘されているとおりである。阿英は、『三十三年落花夢』『自由血』を訳した金松岑について、「その度胸と知識は『孽海花』の作者とすこぶる似通ったところがあるのが分かるであろう。」と評価している。なお、『孽海花』の直接的な創作の動機は、『三十三年落花夢』『自由血』を訳した直後に芽生えたものであり、その啓発を受けたうえで、現実政治の必要に応じるために執筆されたものと思われる。

だからこそ、『孽海花』は清末のその他の小説と異なる点が明らかに存在する。『孽海花』における革命運動について、阿英は引き続き次のように評価している。

『孽海花』は当時の秘密に発行された文学作品でなく、公けに発売されたものである。清朝政府の弾圧下でこのような書き方をやってのけた作者の大胆さと見識は立派である。『官場現形記』『二十年目睹之怪現状』の到達し得なかったところであろう。²⁷

時萌は『孽海花』の主題について、『官場現形記』『老残遊記』『二十年目睹之怪現状』と比べたうえで、「ただ『孽海花』の全局こそが、光り輝いて目を奪うばかりの革命民主主義の光彩にきらめき輝いている。」²⁸と高く評価している。

なお、金松岑は完全に『孽海花』を政治小説として執筆したと思われる。なぜならば、『三十三年落花夢』『自由血』の巻末に付け加えられている『孽海花』広告においては、ともに、「政治小説」という角書が明確につけられている²⁹。30年余り経た金松岑は回想においても、「五十年来の政治小説を作った。」と自慢している³⁰。また、「政治歴史小説であり、体裁は写実に近い。」³¹との指摘もある。

以上により、金松岑は『孽海花』創作において、政治宣伝に重点を置いていると考えられる。金松岑のこうした思想は、1年後の1905年6月、『新小説』第17号に掲載した「論写情小説于新社会之關係」という小説理論の文章につながっている。この文章において、革命的激情を汲み取ることができる『十五小豪傑』、『海底旅行』『東欧女豪傑』などの外国小説（主に政治小説）を崇拜する心理は、依然として衰えていない。さらに金松岑が小説を借りて革命を激励し、前進し奮い立たせようとする宗旨が表されている。これは『孽海花』の着想と創作に密接に関わっているところがある。そのため、金松岑は小説創作を好まなくても³²、政治宣伝のために『孽海花』の執筆を開始したのであろう。

『孽海花』が「熱烈に歓迎された原因は主としてその思想にある。」³³との指摘もある。

その思想的進歩は、「当時一流と目される作家たちを超越しており、李伯元、吳趸人もその下に屈服せざるをえない」ほどの、「非常に強固な革命的傾向を表している」³⁴ ことにある。それは満清政府に反対し、民族革命を主張することであった。ここには『三十三年の夢』における革命思想との類似性が十分見られる。

なお、「作品の中で彼（曾樸——引用者注）はまた十分に、陳千秋、孫中山、史堅如などの革命党人への同情を示している。」³⁵ との指摘もある。実はこの点については、金松岑の書いた『孽海花』にすでに明確に明記されている。そしてこの同情は『三十三年の夢』においても、充分現れている。中国革命に献身した滔天が孫文の率いる中国の革命派に同情し、それを支持する熱意は、印象深く感じられる。この点において、『孽海花』に表されている革命党人への同情はまた、『三十三年の夢』と一致している。

そして、『孽海花』は最も早く孫文などの革命党人を描いた小説であった。『孽海花』における、その他の同時代小説にはない、このような独特な思想は、『三十三年落花夢』『自由血』と密接な関係をもつ。さらに言えば、『三十三年の夢』における政治意識が『孽海花』に浸透している可能性をうかがうことができる。

要するに、政治思想の面において、両作品には直接的ないしは潜在的な影響関係が存在すると考えられる。

4 両者の影響関係に見られる明瞭な点

具体的にどのような点において『孽海花』は『三十三年の夢』を受容したのであろうか。以下、影響関係のあると思われる明瞭な点を項目に分け、両作品のプロットと登場人物をそれぞれ対比してみることにする。

(1) 作品のプロットについて

金松岑は第4、5回に革命志士孫汶、陳千秋、陸崇桂、英国人摩爾肯（モルゴルン）などを登場させる革命運動に多少触れている。金松岑の第4、5回に見られる孫汶の革命党に関する記述は、史実の前後関係と合わず、曾樸は1927年からの第五回目の全面的な書き直し際に、金松岑の第4、5回を第28回以降に編入した。そして第28回から、『三十三年の夢』に現れている宮崎滔天、曾根（曾根俊虎）、南万里（平山周）などの日本人を相次いで登場させた。金松岑は『三十三年の夢』から枠組という大きな範囲にわたる影響を被ったのに対し、曾樸はそのプロットを見ると、『三十三年の夢』より細部にわたる影響を受けたことが明らかである。次にプロットの細部からその受容の明瞭な4点について述べる。

① 大人物を物色する場面

『孽海花』第28回では、革命党人陳千秋はすでに天叟竜伯と一緒に日本に滞在している。そして、第29回からは陳千秋の亡命経緯を遡る。陳千秋は日本に亡命する前に、大

人物を物色するために、上海に赴いた。しかし出会った人は、ほとんど、醉生夢死のどら息子でなければ、臆病な商人である。さらに、大平天国に献策した王紫詮（王韜）や、広学会のために救国学説を宣伝する蔡爾康（蔡爾康）、科挙の廃止、学堂の開設を主張するだけの維新外交官王子度（黄遵憲）、または国会開設、憲法制定を主張するだけの唐猷輝（康有為）など、いずれも「確固とした独創的な見解のない政論」の論者である。優れた人材はなかなか見つからなかった。それから小説の後半では、曾根の紹介で日本志士南万里と知り合う場面につながる。

この大人物を物色する場面の描写は、『三十三年の夢』にも存在している。

『三十三年の夢』の第16章「再び夢寐の郷国に入る」において、滔天は陳白と知り合いになり、「南清の游」に賛成してくれた陳白は、滔天に友人何（何樹齡——引用者注）への紹介状を与えた。したがって、滔天は紹介状に基づいて「それを以て支那の貴重な人材と知り合うため」³⁶、中国の南方に赴く。まず、南万里とマカオに行き、南万里と知り合いの張（張玉濤——引用者注）という人を訪ねた。張は、「言秘密会中の事に及べば、口を噤んで敢て言わず」、「すなわち問うに何君の居所をもってすれば、冒頭必ずその人と交際なきことを弁じて、現に広東何某のところにあるを聞くと言書するのみ」³⁷とする。滔天等は張に失望し、何を訪ねた。何はと同様に「清国の弊政を慨し孤独を悲む」一方で、「その孫逸仙と相知らざるを弁疏し、陳白と親友ならざるを説明する所、人をして其怯を思わしむ」³⁸人物である。滔天はまた失望した。しかし、何の話から知り得た、香港にいるもと興中会会員欧〇〇（『孽海花』中の欧世傑——引用者注）を訪ねることができた。欧は張、何より激越で、「兩位の志もし吾党の事業を助くるにあらば、宜しく急に孫逸仙と相知るべし、彼れ前月すでに倫敦を發するの報あり、不日まさに貴国に到着すべし、彼の貴国に至る所以の故、また実に貴国俠士の助力を求むるに在り」³⁹と孫逸仙の行方を教えた。欧の一言は、小説後半の、滔天と孫逸仙との初対面が実現できる場面につながる。

両作品に登場する人物の名前は必ず一致しないものの、豪傑志士を幾多の曲折を経て物色する場面が一致している。

② 曾根の仲介について

『孽海花』第29回において、優れた人材を見つけることができなかつた陳千秋は、ある日、日本浪人がよく集まる「常磐館」の前で旧友日本人曾根を思い出し、名刺を出して面会を求めた。その時、折よく曾根と一人の友人が帰ってきた。そこで、曾根は、「失礼ながら、一人の同志を紹介します。彼は貴国改革を扶助する義俠南万里で、また天毀竜伯の親友であります。先生は些かご存知でしょう。」⁴⁰と言いつつ、ちょうど居合わせた日本志士南万里を陳千秋に紹介した。

この中国志士と日本志士を引き合わせる場面は、『三十三年の夢』と『三十三年落花

夢』において、滔天が横浜で曾根を通して、革命党陳白と知り合いになったこととほぼ一致している。

『三十三年の夢』の第17章「再び夢寐の郷国に入る」において、滔天は友人の小林の処で、長兄の親友である曾根と知り合うことができた。曾根は滔天に中国人を紹介するため、陳白の名刺を滔天に渡す。滔天は陳白の住所を探し出して、名刺を通して面会を求め、陳白と意気投合し、知り合いになった。そこで、中国志士と日本志士との提携の端緒が開かれた。

曾樸は、『三十三年落花夢』における宮崎滔天と陳白と知り合いになったプロットを書き直した。宮崎滔天のかわりに南万里を登場させ、場所は日本の横浜を上海に替えただけである。

つまり、両作品にはともに、曾根の仲介を通して両国の豪傑志士が知り合いになったというプロットが存在する。このような類似した場面は、曾樸の想像だけによって偶然に一致したとは、考えられない。

③ 滔天二兄のアジア革命の主張について

『孽海花』第29回において、陳千秋は南万里と知り合って話題にのぼった天弼竜伯について、次のように言っている。

天弼竜伯君には会ったことはありませんが、彼のご令兄宮崎豹二郎は私の親友です。彼（宮崎豹二郎のこと——引用者注）は、アジア革命は中国から始めるべき、中国が克服したら、印度を興すことができ、暹羅、安南が振起し、比律賓、埃及を救うことができる、と主張しました。実に東アジアの明るい灯です。しかし残念ながら彼は死にました。天弼竜伯君はやはり彼の未完の志を続けています。まさに私たちの最も忠実な同志です。⁴¹

『三十三年の夢』第17章「再び夢寐の郷国に入る」で、曾根の紹介で滔天は陳白に会い、陳白が二兄弥蔵の親友であることを確認できた。陳白は滔天の口から二兄の死を知り、「天を仰いで歎じて」、「感慨に堪えざりけん、卓子を拍って総て天命なり」⁴²と悲しみ惜しんだ。第8章「大方針定まる」において、滔天は「二兄は余がために闇中の燈明たりしのみならず、また一生の進路を指示する羅針盤となれり」⁴³と二兄を賞賛している。二兄の主張はすなわち、「願くば共に一生を賭して支那内地に進入し、思想を百世紀にし心を支那人にして、英雄を取攬してもって継天立極の基を定めん、もし支那にして復興して義に頼て立たんか、印度興すべく、暹羅安南振起すべく、比律賓、埃及もって救ふべきなり」⁴⁴というアジア主義の思想である。

そこで、この主張を聞いた滔天は「余が一生の大方針は確立せり」⁴⁵としたうえで、

二兄弥蔵から受け継いだアジア主義の思想を志した。そして、第14章「嗚呼二兄は死せり」において、二兄の死を述べたうえで、滔天は、自己の志望が「実に二兄の余に与ふる所にして」、「二兄は実に余が活動の源泉たりしなり」⁴⁶という、二兄の志望を継承する決心が表されている。

対照してみると、二兄宮崎弥蔵の名前は『孽海花』では、宮崎豹二郎に変わったが、両作品に含まれる、滔天の二兄の死、陳白（陳千秋）との友情、およびアジア主義の思想は、完全に一致している。とりわけ『孽海花』における二兄の主張は、間違いなく『三十三年の夢』第8章「大方針定まる」からそのまま引用されたものである。

④ 南万里の考察、畢嘉銘（畢永年）の連絡について

『孽海花』第29回に現れる「常磐館」において、陳千秋の「南万里君の今回の湖南行にはどのような収穫がありましたか。ぜひ教えてください。」⁴⁷との言葉に対して、南万里は、次のように答えている。

私が今回貴国に来た目的はもっぱら、様々な秘密の党、会を連合するためです。湖南は哥老会の古巣です。私は今回、大頭目畢嘉銘と知り合いになりました。そして利害を陳述して、彼を感化しました。また三合会との代々の敵対関係を解消しました。今では貴省にも行きたいです。ただし、今回の旅では、私と天駭竜伯がそれぞれ南北を分担します。彼は北方に、私は南方に行きます。貴会は南方の有力な革命団体です。本日、閣下にお目にかかることができましたのは、天が与えてくださったご縁ではございませんか。貴会の主旨、人物を詳しく教えてください。連合のために、紹介状をお願いします。⁴⁸

夕暮れ、陳千秋が「常磐館」を出て住居に戻ってすぐ、孫汶から武器輸送の暗号電報が届いて、急いでそれを手配した。また陳千秋は戻る途中に、哥老会の頭目畢嘉銘に派遣された警察と名乗る数人に誘拐された。その目的は孫汶の紹介を依頼するためである。ついに哥老会、三合会、興中会の三会合同で青年会が成立し、孫汶を統領とした。この南万里の湖南行と畢永年（『孽海花』中畢嘉銘の実名）の活動は、『三十三年の夢』において、かなり詳しく述べられている。

例えば、第20章「南洋の風雲と吾党の活動」には、「既にして南万里は両湖（湖南、湖北を指す——引用者注）の視察を終りて帰り来れり、いう〇〇〇の先容によりて哥老会員と交結するを得たり」⁴⁹とある。また第18章「素人外交家」には、「上海にて二人両手に分れて、南万里は北方に向ひ、余（宮崎滔天——引用者注）は南方に向ふこととなれり、余は先づ香港に至り、東洋館に投じて旧知親友と来往し、窃に興中会及び三合会中の人に交を結んで、其形勢を視察し、」⁵⁰との記述が見られる。

そして、第21章「形勢急転」において、畢永年の連絡について詳しく述べられている。『孽海花』と関わっている部分は以下のとおりである。

これより先、湖南の同志畢○○君の書到る、いう哥老会の頭目数人を率いて香港に到らんとすと、(中略) ほぼ三合、興中、哥老の三会を合して一つとなし、○君を推して統領となさんとするの意を漏らし、⁵¹

この望ましい結果になった理由に対して、滔天は、「南万里が前年の湖南遊その因をなし」⁵²と南万里の役割を評価している。

まもなく、畢永年が来て、興中会、哥老会、三合会の頭目12人が合同の会議を開いた。畢永年の説得によって三会が合併して興漢会が結成された。しかも、陳白は終始三会合併に参加した人物である。

つまり、両作品における南万里の考察、畢嘉銘(畢永年)の連絡に関する描写は、どれほど似通っているかが一目瞭然である。さらには、『孽海花』第29回において、『三十三年の夢』中の第20、21、18章をまとめたうえで取り入れていることが明らかである。

以上のプロットは金松岑の創作ではなく、曾樸の執筆であるが、しかし『三十三年落花夢』は以上のようなプロットや描写がほぼ『三十三年の夢』に基づいて忠実に訳されている。このような酷似するプロットは、もし伝聞に頼っただけとすれば、到底、このように似通うことはないと思われる。曾樸は革命党人の事跡を書き直す前に、『三十三年落花夢』を詳しく読んでいたと思われる。だからこそ、その影響の痕跡が以上のように明らかに存在するのであろう。

(2) 登場人物の設定について

曾樸の作った六つの時代に登場させる予定の人名は110人であった。実際には35回までの『孽海花』に登場した人物は総勢278人にのぼった。

『三十三年の夢』と『孽海花』の登場人物は、その大勢が重なっている。西太后、康有為などの頑固派、改良派のほかに、革命派の人物、例えば、孫文、楊雲衢(楊飛鴻)、鄭士良(鄭良士)、史堅如、陳千秋(陳白と思われる——引用者注)、畢永年(畢嘉銘)、欧世傑、および英国人摩爾肯⁵³等々が登場している。

この陳白に関しては、少々触れておく必要があると思う。この陳白とは、曾樸が「海外運動」時代を書く予定だった8人中の1人であることから、重要な人物として描こうとしたと思われる。しかし、実際の執筆において、陳白が現れることはなく、陳千秋が主要な人物として登場する。「『孽海花』人物索隠表」によると、この陳千秋は興中会の会員であり、横浜の華僑商人でもあるという⁵⁴。しかし、本文では陳千秋は華僑商人で

はなく、武器輸送が暴露されたため、日本に亡命した革命志士として描かれた。ちょうど『三十三年の夢』中の陳白と全く同じ人物のように読むことができる。これらを考え合わせると、曾樸は『三十三年の夢』中の陳白を『孽海花』中の陳千秋として描いたと考えることができる。

『孽海花』に明らかに影響を及ぼしたと思われる人物としては、主に天叟竜伯、曾根、南万里の3人が取り上げられる。この3人の日本人は『孽海花』第28回から登場することから、曾樸の手によって書かれたものであると言える。そこで以下この3人の人物像を検討しつつ、如何に取り入れていたのかを明らかにする。

まず、天叟竜伯の人物像を見てみる。『孽海花』における天叟竜伯のモデルはすなわち宮崎滔天である。

『孽海花』第28回においては、天叟竜伯の風貌が次のように描写されている。

ふと見ると、体の大きい人物が、髯が乱れて伸び放題であり、目が炯炯として、髪がふり乱れ、顔が大きく、鼻が大きくきつとあがった眉をして、和服を身につけ、悠然として跨いで入ってきた。⁵⁵

こうした天叟竜伯に対する描写は、完全に滔天の風貌である。「滔天の顔は類を絶したもので、人をして驚異の目を注がしむる。そのひげもじやな大きな顔は一度見たら忘れられない特色がある。雄偉魄貌一見その只人にあらざるを思はしむる。」⁵⁶という滔天に対する回憶がその裏づけである。そのため、『孽海花』における天叟竜伯の風貌は、『三十三年の夢』と金沢本『三十三年落花夢』の冒頭に付け加えた滔天の写真の様子を説明しているかのようである。おそらく曾樸は、この写真に基にして書いたといった方がよい。

なお、『孽海花』における天叟竜伯の侠の人物像については、以下の考察から見て取ることができる。

例えば、第28回から登場した天叟竜伯は日本と中国の間を往来している「支那革命の扶助を主張する奇人である。」⁵⁷とされている。そして、小山六之介（小林豊太郎）が清国全権大臣である李鴻章を暗殺しようとする前に、天叟竜伯は小山六之介による暗殺行動を阻止した。このことから、天叟竜伯の大義を表現しようとした意図が伺える。そして、第29回において、清政府当局が日本で陳千秋を逮捕しようとしたが、しかし逮捕の権利もなく、しかも、「天叟竜伯が侠客と自負し、彼（陳千秋——引用者注）の護衛を担当している」⁵⁸ため、当局は結局あきらめざるを得なかった。

陳千秋は天叟竜伯に護衛されて日本に亡命したのである。しかも、二人はいつも同行し、革命に関して討議を行う革命同志として描かれている。実際には、もともと『三十

『三十三年の夢』では、滔天は康有為が日本へ亡命するのに同行した。これについては、『三十三年の夢』の第18章「素人外交家」と第19章「康有為日本に入る」に詳しく述べられている。しかし、曾樸は滔天の正義感に溢れる人物像を十分に描き出すために、護衛対象を革命党人の陳千秋に変えたと考えられる。

だからこそ、小説には、前述のように南万里と陳千秋との談話において、天弢竜伯が二兄のアジア革命の思想を受け継いだ中国革命を扶助する最も忠誠な同志だと賞賛されている場面がある。そして、第34回では、武器弾薬の輸送の件に関して、日本志士天弢竜伯父子と曾根の援助があるので、きっと順調に進むであろうと陸皓東と楊雲衢の二人が述べている場面も描かれている。

『孽海花』において、天弢竜伯の侠に対する描写は直接的なものではなく、ほとんどが他の登場人物の口を借りる間接的描写によって展開されたものである。これにより、小説の後半においてまた詳しく描き出される可能性が存在する。しかし、『孽海花』における中国革命を扶助する天弢竜伯の侠は、『三十三年の夢』の影響を強く受けたと十分に考えられる。

次に、曾根の人物像を見てみる。前述のように、曾根は仲介役として登場している人物である。この曾根は、原作『三十三年の夢』に9回、『三十三年落花夢』に7回、『孽海花』に6回それぞれ現れている。つまり、曾根は三つの作品においていずれも、中国革命に同情を寄せる者としてのみならず、中国革命の熱心な支持者として描かれている。とりわけ、中でも、曾根の両国の豪傑志士の提携の端緒を開いた仲介役としての存在が際立っている。

最後に、南万里という登場人物について検討してみる。南万里が天弢竜伯、曾根たちと同じく、五回目の修訂本『孽海花』に登場するのは、『真善美』雑誌に掲載された1927年以後のことである。南万里は同じく豪傑、義侠の人物像として登場している。これは『三十三年の夢』と完全に一致している。しかし事実は、そうではなかった。例えば、1907年秋、南万里、北一輝たちと、滔天、萱野長知たちとの間に衝突があり、南万里たちが孫文の同盟会の機密を漏らしたという疑いがあるので、孫文はその当時滔天に宛てた手紙の中で、今後、南万里、北一輝を信用しないと言っている。その後、孫文、滔天の二人と南万里との往来はずっと絶えたままとなったようである⁵⁹。しかし、曾樸は孫文、滔天が南万里らと絶交したことを知らず、『三十三年の夢』を基に、実際には機密を漏らした南万里を相変わらず豪傑とみなしていたと推測される。

以上から分かるように、『孽海花』の人物像は『三十三年の夢』の人物像と全く同じ筋から出たと言ってもいいほど合致している。曾樸は官界出身であり、西太后、李鴻章、張之洞、丁汝昌、康有為、黄遵憲などの各界の大人物をモデルにしたということが言えるのならば⁶⁰、日本人の革命志士の実名と事跡を知った経緯は、『三十三年の夢』の漢訳

本『三十三年落花夢』に頼ったと考えられる。

つまり、『三十三年の夢』が、金松岑に大きな枠組を与え、その詳細な内容については曾樸が受容することとなった。『孽海花』には革命運動に関する描写が三つの章にわたり、しかも、主に第29章に集中している。そのため、全体から見れば、その内容は決して多いとは言えない。その理由は「多分第一次の資料が極めて少ない。」⁶¹と指摘されている。なお、曾樸自身も「間隔がすでに長くて、言うまでもなく、すでに集めた資料は、ほとんど十の八九を忘れてしまった。」⁶²と断わっている。そのため、『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』が主な資料となった。とくに、金松岑に比べて詳しく描写できたのは、『三十三年落花夢』によったためだと考えられる。

なお、『孽海花』は直接『三十三年の夢』から影響を受けたのではなく、金訳本『三十三年落花夢』を媒介として受容したと言う点については、以下のような裏づけがある。例えば、前に指摘した『三十三年落花夢』における「それを以て支那の貴重な人材と知り合うため」という金松岑の加筆は、曾樸によって広く展開された。一方、曾樸は1927年から金松岑の第4、5回を第28回以降に移動し、書き直したが、その当時、1926年2月までにPY訳『三十三年落花夢』がすでに第3版まで刊行されていたことから、曾樸はPY訳本に頼った可能性が非常に高い。ただし、拙稿でも述べたように、このPY訳本は金訳本中の数箇所だけに手を入れたほかには、完全に金訳本である⁶³。つまり、『孽海花』は金訳本『三十三年落花夢』に頼ったと言っても過言ではない。他方、『孽海花』に対する影響は、『孫逸仙』ではなく、金訳本『三十三年落花夢』によるものである。そのように断言できる理由は、上述の原作第8章、第16章の内容が『孫逸仙』には見られず、一方、『三十三年落花夢』にはかなり詳しく訳されているからである。

以上のような両作品のプロットと登場人物に対する考察を通して、『三十三年落花夢』が『孽海花』に及ぼした影響を見てとることができる。

5 おわりに

以上、清末期の中国における『孽海花』を取り上げて、この小説が漢訳本『三十三年落花夢』を通して宮崎滔天の『三十三年の夢』を受容した痕跡について考察した。

『三十三年の夢』は、孫文と滔天に関する研究の第一級の根本史料であるのみならず、文学作品という視点から見ても、この作品には孫文と滔天の人物像の描写に対して注目すべき点がある。『三十三年の夢』は二人の関わり、および二人の人間像を最も早く描いている作品である。そして、『孽海花』も同様に、二人をモデルにした人物を初めて登場させている小説である。

こうしたことから、『三十三年の夢』が孫文と滔天を同時代の小説に登場させる先駆者的役割を果たしたことが分かる。その一方、漢訳本『三十三年落花夢』は清末小説に

において同じく先駆的且つ仲介役的存在であると思われる。だからこそ、二人の人物像は『孽海花』およびそれ以降の多くの清末小説においても、ほとんど共存するという形で現れている。

『三十三年の夢』は政治宣伝としても、文学作品としても、清末期の中国とかなり密接に関わっていることから、この作品の影響力は強大でかつ広範囲にわたるものであったといえる。文学的視野から、とくに清末小説に最も影響を与えた明治日本の政治的文学作品の一作として、清末小説における『三十三年の夢』の潜在的影響力は無視できないであろう。

『三十三年の夢』が清末四大譴責小説の一つである『孽海花』に与えた影響について本稿で明らかにした。そして、『三十三年の夢』と『孽海花』との関わりは、今後の『孽海花』研究において看過できない一側面となるとと思われる。

注

- 1 魏紹昌編『孽海花資料』（増訂版）上海古籍出版社、1982年7月 p134。
- 2 曾樸「修改後要説的幾句話」真善美書店『孽海花』修訂本、1928年1月、底本は前掲『孽海花資料』（増訂版）所収 p128。
- 3 範煙橋「孽海花造意者金一先生訪問記」『明星』副刊、1934年10月、底本は前掲『孽海花資料』所収 p146。
- 4 前の第一冊十回は書き上げたが、革命的内容を見た岳父潘梅孫は、親類や友人まで連座することを恐れて、怒って出版を許さなかったばかりではなく、原稿まで隠した。そこで、曾樸は盗み出して、日本で印刷に回し出版した（崔万秋「東亜病夫訪問記」前掲『孽海花資料』 p142）。これは日本翔鸞社で印刷した一つの理由であろう。なお、友人金松岑、徐念慈も同じく翔鸞社に依頼した。そして、この翔鸞社は数多くの中国書を印刷出版した。例えば、初版『三十三年落花夢』、『孽海花』の第1集（1905）、第2集（1906）のほかに、1904年に徐念慈訳『美人妝』を印刷、1906年に王紹曾編集『経済学講義』を印刷した。なお、1904年に章太炎の『尙書』を発行し、1905年に周作人訳『玉虫縁』を発行した。
- 5 前掲「修改後要説的幾句話」、および阿英『晚清小説史』人民文学出版社、1980年8月 p22 参照。
- 6 拙稿「『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について」『言語文化論集』31巻第1号 2009年10月。
- 7 管見によると、目加田誠（『孽海花』『文学研究』〔九州大学大学院、九州大学文学部〕54、1956年4月）は、「因みに金松岑の訳した三十三年落花夢は中国でも愛読されたものようである。『孽海花』二十八回あたりに出てくる日本浪人天叟竜伯に宮崎滔天の面影を見せていることをも考慮に入れていいと思う。」、と一言だけ触れている。中野美代子（「『孽海花』ノート」注6参照、『北海道大学外国語・外国文学研究』第5号 1958年1月）は、「同じ革命運動についても、曾樸が虚無党を中心とするアナーキーなテロリズムを興味ぶかく描いたことは、『孽海花』

を執筆する最初の動機を提供した友人の愛自由者（金松岑）が、ロシヤの虚無党史を扱った小説『自由血』を編訳し、また宮崎滔天の『三十三年之落花夢』（原題『三十三年の夢』）を翻訳したことと、関係がある。」と指摘している。松枝茂夫（「孽海花について」『清末・五四前夜集』1963年8月p426）は、「また金松岑らを通じて、孫文（書中の孫汶）ら革命党の内部事情を知る便宜も得たであろう」と指摘されている。しかし、3人とも具体的な関わりには触れていない。

- 8 前掲「修改後要說的幾句話」。
- 9 時萌「關於金松岑」『中国近代文学論稿』上海古籍出版社1986年10月p403。
- 10 樽本照雄『新編増補清末民初小説目録』（齊魯書社2002年4月p505、506）所収の孽海花版本による。
- 11 前掲拙稿「『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について」。
- 12 張純「金松岑『孽海花』的写作与发表」『第三届中国近代文学学术討論会論文』、底本は、袁健、鄭榮編著『晚清小説研究概説』天津教育出版社、1989年7月p188参照。
- 13 阿英は『自由血』の巻末に付けた「孽海花」の広告は、最初の広告だと指摘しているが（『孽海花』雑話）『小説二談』上海古典文学出版社1958年10月、底本は『阿英全集』第7巻（安徽教育出版社2003年7月）による）、実際は、三ヶ月前の1904年1月に『三十三年落花夢』の巻末に掲載されたのが、さらに早い。
- 14 吉野作造「三十三年の夢・解題」初出『帝国大学新聞』第168～170号、題名「『三十三年の夢』——その再刻について」1926年5月。底本は宮崎滔天著、宮崎龍介、衛藤瀧吉校注『三十三年の夢』（平凡社1967年10月）所収による。
- 15 範煙橋「孽海花造意者金一先生訪問記」。
- 16 範煙橋「孽海花側記」『光明日報』1961年5月18日。
- 17 前掲崔万秋「東亜病夫訪問記」『孽海花資料』p142。
- 18 蔡元培「追悼曾孟樸先生」『宇宙風』第2期1935年10月、底本は『孽海花資料』p198。
- 19 前掲「修改後要說的幾句話」。
- 20 前掲目加田誠論文はその虚構について考察している。
- 21 于平『明清小説外圍論』中国青年出版社1999年12月。
- 22 中国では『三十三年落花夢』は近代小説として認められている。例えば、陳大康『中國近代小説編年』（華東師範大學出版社2002年12月）中で「近代小説作者及其作品一覽表」および「近代小説篇名索引」に収めていることから分かる。
- 23 金松岑「説略」『三十三年落花夢』上海国学社1904年1月。
- 24 「広告」『三十三年落花夢』上海国学社1904年1月。
- 25 『警鐘日報』第116、118～124号（1904年6月）に掲載されている鏡今書局「自由血出版」という広告による。なお、『孽海花』における『近世無政府主義』の漢訳本『自由血』からの受容は別稿にゆずる。
- 26 前掲範煙橋「孽海花側記」。
- 27 阿英著、飯塚朗、中野美代子訳『晚清小説史』平凡社1979年2月p33。
- 28 時萌『『孽海花』創作規画全貌管窺——兼考曾樸手擬『孽海花』人物名單及金、曾合擬六十回目』『中国近代文学論考』p131。
- 29 阿英の指摘と同じように、時萌（「關於金松岑」前掲『中国近代文学論考』所収）は「1904年3

月に、金松岑は小説の題名を『孽海花』に定め、しかも政治小説の角書をつけている」と『自由血』巻末の広告だけに触れている。

- 30 金松岑「致友人書」『衛星』第1巻第1期1937年1月、底本は『孽海花資料』p148。
- 31 拙軒「談孽海花」、孟樸『孽海花』世界書局1967年12月所収。
- 32 前掲「孽海花造意者金一先生訪問記」。金松岑は曾樸に渡した理由について、「以小説非我所喜、故任孟樸統之（小説は私の好みではなく、故に孟樸の続作に任せた。）」と言っている。
- 33 前掲飯塚朗、中野美代子訳『晚清小説史』。
- 34 前掲飯塚朗、中野美代子訳『晚清小説史』。
- 35 前掲飯塚朗、中野美代子訳『晚清小説史』。
- 36 この言葉は、『三十三年落花夢』に見られる訳者金松岑の加筆である。底本は、訳者兼発行者金一（金松岑のペンネームである）『三十三年落花夢』、国学社発行、1904年9月p51。
- 37 本稿で扱った『三十三年の夢』の底本は、宮崎滔天著『宮崎滔天：三十三年の夢』（日本図書センター、1998年8月）である。この部分は『宮崎滔天：三十三年の夢』（p142）から引用であり、その訳文は、前掲金訳本『三十三年落花夢』（p51）に見られる。なお、原作『三十三年の夢』と金訳本『三十三年落花夢』の各章には番号が付いていないが、論述の便に鑑み、本稿では筆者が番号を付けた。
- 38 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p143、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p51）にある。
- 39 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p145、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p52）にある。
- 40 本稿で扱った『孽海花』の底本は、『孽海花』（増定本）（上海古籍出版社、1979年8月）である。この部分は前掲『孽海花』（p272）から引用である。
- 41 前掲『孽海花』p272。
- 42 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p140、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p50）に見られる。
- 43 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p60、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p21）に見られる。
- 44 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p61、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p22）に見られる。
- 45 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p62、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p22）に見られる。
- 46 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p131-132、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p48）に見られる。
- 47 前掲『孽海花』p272。
- 48 前掲『孽海花』p273。
- 49 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p189、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p73）に見られる。
- 50 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p157、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p59）に見られる。
- 51 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p202、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p78）に見られる。
- 52 前掲『宮崎滔天：三十三年の夢』p203、訳文は前掲金訳本『三十三年落花夢』（p78）に見られる。
- 53 「摩爾肯」はすなわち「モルゴルン」であり、『三十三年の夢』には「毛古倫」という漢字名が使われている。金松岑は『三十三年落花夢』においてもそのまま「毛古倫」使っている。
- 54 劉文昭増訂『孽海花』人物索隠表『孽海花』（増訂本）上海古籍出版社、1979年8月。
- 55 前掲『孽海花』p264。
- 56 薄田斬雲『宮崎滔天君の思い出』底本は渡辺京二『評伝宮崎滔天』大和書房、1976年4月p12。
- 57 前掲『孽海花』p263。
- 58 前掲『孽海花』p269。

- 59 衛藤瀋吉「人物略伝」、宮崎滔天著、宮崎龍介、衛藤瀋吉校注『三十三年の夢』平凡社 1967年10月所収。
- 60 前掲中野美代子「『孽海花』ノート」。
- 61 前掲時萌「『孽海花』創作規画全貌管窺——兼考曾樸手擬『孽海花』人物名單及金、曾合擬六十回目」『中国近代文学論考』p129。
- 62 前掲「修改後要説的幾句話」。
- 63 前掲拙稿「『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について」。

付記

本稿は筆者の博士学位論文『清末政治小説における明治政治小説の導入と受容——日中近代文学交流の一側面——』の第九章をもとに若干の加筆修正をしたものである。